

明治学院大学 社会学・社会福祉学会



学内学会会報 第27号

社会科3期生・天達忠雄先生のこと

今春ご退任された河合克義先生よりご寄稿いただきました。

河合 克義 (学長特別補佐)



河合 克義 先生

本学社会学部は、社会科として1928(昭和4)年に誕生しました。そこから数えて、社会学部は今年で90年になります。

さて、1930年に入学した学生に天達忠雄先生がいます。社会学部の初代学部長、また学長代行もなさった先生です。この先生に私も大学院で教えを受けましたが、ここで、この先生の

人となりを紹介したいと思います。

天達先生は、1912年に兵庫県に生まれました。お父様は、鉾山の仕事(所長)をしており、転勤が多く、下関市の長姉の家に移り、中学卒業までそこで過ごしていました。1927年にお母様が亡くなります。2年後の1929年、日本基督教会下関教会で受洗し、翌年、明治学院高等部社会科に入学します。そしてセツルメント活動にかかわります。また学内問題からストライキを計画実行しました。1931年に肺結核になり、下関へ戻り、療養生活を送ります。そして海峡を隔てた門司市の地方新聞の社会部記者などを務めました。他方、下関市内の失業朝鮮人・日本人による「日本人朝鮮人失業者同盟」の創設にかかわり、逮捕されたこともあります。

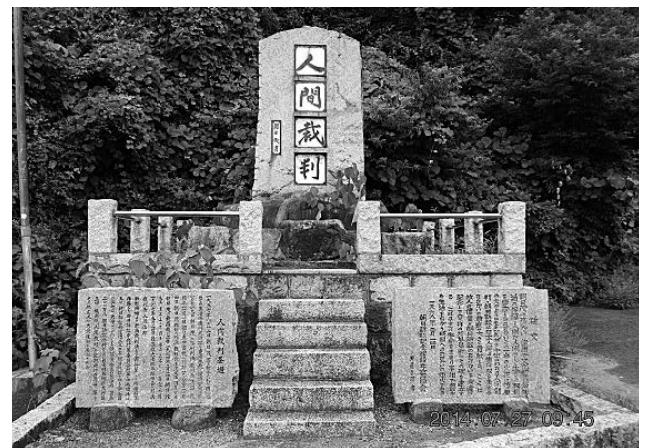
1936年、明治学院に戻り、高等部社会事業科に編入します。また明治学院セツルメントにかかわり、警察に検挙されたこともありました。当時は、セツルメン

ト活動が危険視されていたのです。1938年、社会事業科を卒業し、中央社会事業協会附属社会事業研究所の研究生となります。研究生終了後、同研究所の所員として採用されます。後に、調査部門に配属され、浦辺史(後に日本福祉大学学監)、重田信一(後に明治学院大学教授)と調査研究に取り組みました。

1943年11月から45年10月まで特別高等警察に検挙され、淀橋警察、巣鴨拘置所、豊多摩刑務所に拘置されました。看守の目を盗んで書いた短歌は、後に『幽囚の歌』として出版されています。

さて、1946年に明治学院専門学校社会科教授となります。1949年から58年までは明治学院を離れますが、1958年4月、明治学院大学文学部社会科の助教授として戻ってきます。

1965年には社会学部が創設され、初代学部長となります。1968年、大学紛争のなか、若林学長にかわり学長代行を務めました。そして1981年12月、天達先生は



人間裁判の記念碑

再任教授でしたが、ご逝去されました。当時、私は、フランスのナンシー大学に在外研究をしていましたが、天達先生が亡くなられたことで、翌年5月に大学に呼び戻されることになりました。

天達先生の研究と社会的貢献は幅広く、偉大であり、全てを紹介はできません。戦前の研究では、農村地域の生活調査と保健婦の研究があります。戦後、明治学院を離れていた1949年から58年の間は、労働調査協議会で「労働調査月報」の発行に携わっていました。

天達先生の研究そして社会活動の中で、とりわけ注目すべきは、朝日訴訟運動への貢献です。朝日訴訟裁判が終結した1968年2月、「人間裁判」の記念碑が建立され、その「碑文」を天達先生が記しました。天達先生の自筆がそのまま碑に刻まれています。先生の姿勢を学びたいものです。

碑文

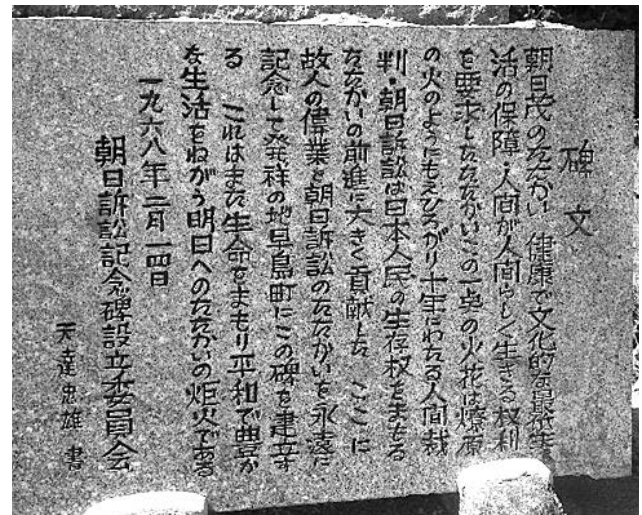
朝日茂のたたかい 健康で文化的な最低生活の保障・人間が人間らしく生きる権利を要求したたたかいこの一点の火花は燎原の火のようにもえひろがり十年にわたる人間裁判・朝日訴訟は日本人民の生存権をまもるたたかいの前進に大きく

貢献したここに故人の偉業を朝日訴訟のたたかいを永遠に記念して発祥の地早島町にこの碑を建立するこれはまた生命をまもり平和で豊かな生活をねがう明日へのたたかいの炬火である

1968年2月14日

朝日訴訟記念日設立委員会

天達忠雄 書



天達忠雄先生の筆による碑文

総会後の特別講演会

長崎広氏【働く障害者への差別・虐待と闘う

『人間を取り戻せ！—大久保製塩闘争の記録—』上映と講演】に寄せて

渋谷 晶 (社会学科3年)

小寺 美波 (社会学科3年)



長崎 広 氏

2017年6月17日に第27回社会学部学内学会総会が行われました。総会後の特別講演会では、「人間を取り戻せ、大塚製塩闘争の記録」の上映と、その大久保製塩闘争に実際に関わった長崎広さんに講演をして頂きました。

長崎さんは明治学院大学を卒業後、葛飾区立石にあ

る原町成年寮という知的障害者の通勤指導施設で働いていました。その後、当時有名だった墨田区にある大久保製塩所の課長と知合いになって、会社に勤務する100人くらいの知的障害者、身体障害者の面倒をみる管理職候補として入社するように頼まれ、原町成年寮にいた職員とボランティアに来ていた学生と一緒に大久保製塩所に入社しました。

大久保製塩所という会社は一般の会社より過酷な24時間操業3交替勤務で、灼熱、騒音地獄、寒風吹き荒ぶ現場だったそうです。労働基準法施行規則第18条に規定されている「健康上特に有害な業務」にあたる

とされているガラス壘製造会社です。また当時160名程度いる社員のうち100名が身体障害者および知的障害者という構成でした。そして当時の会社の実態というのは酷使、差別、虐待、暴力があり、10日間連続の夜勤があり、知的障害者は労働組合にも加入させてくれないといった非常に酷い状況でした。給与に関しても健常者の平均賃金は15万円であるのに対し、知的障害者は表向きは4万円ですが、色々引かれて手取り額がわずか5371円と大きな差が生まれていました。にもかかわらず、「障害者は能力が低いから賃金は低くて当然だ」といった社会全体に蔓延する障害者差別が大久保社長の後ろ盾となりマスコミや行政からも褒め称えられました。大久保実社長は船橋にある知的障害者収容施設大久保学園の理事長をやり、その大久保学園から大久保製壘所に知的障害者を労働力としてどんどん供給していました。また1960年頃からたくさん障害者を雇用して労働大臣から感謝状をもらい、有名なシュワイツァー博士と同じアカデミー賞をアメリカから受賞し障害者雇用促進事業団から多額な融資や補助金をもらっていたそうです。

長崎さんが大久保製壘所に入って半年くらいで職場の中の御用労組の会議に呼ばれました。ここで事態は一変します。その会議で身体障害者をクビにするという話が出たのです。そこで長崎さんは「毎日の障害者への暴力や虐待を労働組合が許しているのか」と声を挙げてしまいました。その発言をした2日後に解雇予告通知が来ました。そこで当時から有名な骨太の労働組合で葛飾青戸にある東京東部労働組合に相談に行きました。

相談をしにいく時のイメージとしては学生運動のように会社の前に30~40人で来てもらってシュプレヒコールをあげてもらおうようなものだと思っていたそうです。しかし当時の東部労組の足立さんという人から「職場の労働者、障害者のために声を上げたんだから、障害者一人一人のところに行き、立ち上がって解雇撤回を要求しよう仲間と訴えることが先じゃないか」と言われました。正直なところ長崎さんはどんな酷いことをされても抵抗もせず、平気な顔をしている障害者たちが立ち上がってくれるとは思いませんでした。しかし尊敬していた足立さんに相談しに行ったのだから言う通りにしよう決心しました。

仲間と訴えるといった活動は決して楽なものではありませんでした。朝から夜勤が始まる時間まで障害者の家を一軒一軒訪ね、喫茶店や公園でも話したりしました。ほとんど寝ないで夜勤に入るといったハードな説得活動でした。3日を費やしても反応は無く長崎さんは夜勤中の深夜に体力的にも精神的にも限界を感じ、工場の塀を越えて近くの公園の電話ボックスに駆け込み足立さんに電話をしました。「足立さんの言う通りにやってみたけど誰も立ち上がらない。このままでは自分が死んでしまうから仕事を早退してもいいですよ？」と言うと足立さんから予想外の返事が返ってきました。「だめだ。今君が帰ったら職場の仲間たちはなんて思うだろうか。君が諦めて逃げ帰ったと思うだろう。倒れるなら職場のみんなの前で倒れなさい」と言われました。長崎さんは仕事場に戻り、結局朝7時まで倒れずに仕事が終わりました。休憩室に行くところには知的障害者、身体障害者30人が座り込んでいました。長崎さんはその光景を見て非常に驚きました。課長たちは「何をしているんだ。すぐ帰れ」と怒鳴ったのですがそれでも障害者たちはみんな手を握ったまま座り続けていました。そのうちに誰かが「長崎さんたちのクビをやめてくれ」と声を挙げたのでした。東京の亀戸労政事務所の金子さんという職員がこの解雇はおかしいと申し入れてくれたこともあり、結局長崎さんの解雇は取り消されました。

この経験を通して長崎さんは障害者に対して、それまでずっと抱いていた考え方がすっかり変わったと言います。自分たちが面倒を見る相手、サポートする相手、助けてやる相手と考えていた知的障害や身体障害者が自分たちの生活を守ってくれていたと気付いたそうです。「足立さんが言っていた『搾取と抑圧のあるところ、必ず仲間は立ち上がる。仲間を信じて運動をきなさい』という言葉の意味も理解出来た」とおっしゃっていました。この闘いは東部労組では「3日戦争」と呼ばれています。このとき長崎さんや大久保製壘所の障害者たちは、生まれて初めて団結し勝利しました。それが大きな自信に繋がったのです。

2017年度 学内学会活動報告

★会報26号発行

5月17日(水) 発行部数 4,000部

★第27回総会・特別講演会・懇親会

6月17日(土) 総会：白金校舎2号館2401教室

懇親会：パレットゾーン2階「さん・サン」

学生17人、教職員9人、卒業生39人、一般49人の計114人が参加。総会後は、濱野ゼミ卒業生の長崎広氏を迎え、『人間を取り戻せ！—大久保製塩闘争の記録—』を上映した後、講演を行った。

★研究発表会

11月11日(土) 白金校舎本館1453・1456・1457・1458教室

発表は、ゼミ6件(社会学科ゼミ3件、社会福祉学科3件)。個人参加14件(社会学科0件、社会福祉学科3件、社会学専攻5件、社会福祉学専攻5件、卒業生1件)。研究発表会の参加者は、学生75人、教職員11人、卒業生6人、一般人0人の計92人(発表者も含む)。今年は、4つの会場で活発な発表が行われた。

○第一分科会(1456教室)

「なぜ、いま西和賀町なのか～生命尊重行政の歴史と現状～」 河合克義ゼミ

「養護老人ホームと軽費老人ホームの現状と課題」 河合克義ゼミ

「医療ソーシャルワーカーにおける卒後教育の現状と課題」 半田博美(17SWM)

「ソーシャルワーク論と人権論の近代主義的構成に内在する『排除の論理』について」 高木仁根(17SWM)

「訪ね住まう湯治場(とうじば)の人口と地域」 永岡圭介(14SGD)

「法的社会現象と人間観についての社会学的試論～阿部勤也の世界観から新自由主義へ～」 石渡拓也(2012年卒)

○第二分科会(1457教室)

「障害者のグループホームにおける現状と課題」 高倉誠一ゼミ

「ハンセン病について伝えたいこと」 柘植あづみゼミ

「精神障害を持つ人の就業・生活支援」 今雪宏恵(17SWM)

「重度重複障害のある人の言葉の表出
～約2年半の記録から、筆談によるコミュニケーションの意義と課題を観る～」 佐藤歌恋(14SW)

「重度知的障害者の生活の量と生活の質から主体的生活を考える～日常生活での活動量を参考にして～」

松崎侑太郎(17SWM)

○第三分科会(1458教室)

「ブラジルタウンの観光地化は、群馬県大泉町の地域活性化につながるのか」 坂口緑ゼミ

「相談援助実習で学んだこととそのグローバル化について」 山田美玖(16SW)

「ソーシャルワーク実習を通して学んだバイステックの7つの原則について」 奈須ひなた(16SW)

「退職後のワーキングホリデー渡航に関する渡航動機の聞き取り調査報告」 大井真澄(16SGM)

○第四分科会(1453教室)

「外国籍女性日本における家庭内暴力被害状況」 李詩琳(17SGM)

「日本社会における子をもつ夫婦の離婚に関する法律制度を改革すべきか？」 野沢慎司ゼミ

「子どもの貧困と対策」 生部愛実(17SWM)

「中国におけるステップファミリーの研究～日本の継子研究との比較を目指して～」 寧爽(17SGM)

「親になることをどのように考えるのか
～インタビューより親役割について子どもを持ちたい理由の考察～」 佐藤舞(15SGM)

★Socially26号発行

3月20日(火) 発行部数 3,000部。

★社会学部・卒業生 部会企画 春の講演会

「若者の政治参加・社会参加を促す取り組み」

3月21日(水)白金校舎1201教室にて開催され、約50名の参加があった。講演者には、横尾俊成氏、後藤寛勝氏を迎えた。横尾氏は、NPO活動、社会貢献活動に必要な人材と資金をどのように集めるのかについて、社会の課題を市民が主体的に解決できるように支援をしていくことが、政治家の課せられた役割であるとお話しされた。後藤氏は、国会議員と高校生のディスカッションイベントの開催、中高生に社会的課題の発見とその解決案を模索する「票育」など、若者と政治を繋いでいく様々なアイデアを活かした活動を紹介していただいた。お二人の講演は閉会時間のギリギリま

で続き、質疑に関しては懇親会に持ち越された。若者の主体的な社会貢献活動・政治参加から拓けていく社会の一端が垣間見られた講演会だった。



撮影：渋谷 章一 氏

2017年度 学生部会活動報告

★戸塚会議 (担当 高松花希・徳田結以・大井川蒼哲・藤山耀太)

5月9日(火)横浜校舎で開催。戸塚会議は、学生部会が日頃どのような活動をしているのかを、1年生に紹介する企画である。参加者は、1年生15人、運営の学生委員3人の計18人。1年生は、大学生活・授業での不安なことなどを積極的に質問していた。

★夏合宿 (担当 渋谷晶・小寺美波)

8月28日(月)～29日(火)マホロバ・マインズ三浦にて開催。参加者は、1年生2人、2年生5人、3年生8人の計15人。秋学期開催予定の企画準備進捗状況確認や、来年度の開催企画の見直し等を話し合った。2日間を通し、1年生から3年生まで情報共有と交流を深めることができた。

★社会学科ゼミサロン (担当 清水江理・杉下陽菜)

10月10日(火)、12日(木)、13日(金) 白金校舎で開催。3日間での参加者は238人、運営の学生委員14人。

予想以上の参加があり、アンケート用紙が足りなくなるほどだった。教室に入りきれないこともあり、ローテーションをし、全員が話を聞けるように対応をした。

★戸塚会議 (担当 安田奈伎紗)

10月26日(木)横浜校舎にて開催。参加者は、1年生5人、運営の学生委員2人の計7人。春学期開催時は社会学科の学生が多かったが、今回は社会福祉学科の学生の参加が多かった。今年度は13名の1年生が学生会に入ってくれた。

★社会福祉学科1年生コースガイダンス (担当 相場 洸風・安田奈伎紗)

11月9日(木)横浜校舎にて開催。参加者は1年生0人。運営の学生委員2人。パワーポイントを作成し、プロジェクターを準備していたが、残念ながら参加者はなかった。告知の方法等を見直し、次年度に活かしたい。

異動・消息

2017年11月 濱野一郎名誉教授ご逝去

学内学会 新体制

会長	柘植あづみ (社会学部長・社会学科教授)
副会長(主任)	石原 英樹(社会学科教授)
副会長	久保 美紀 (研究所所長・社会福祉学科教授)
編集担当	安井 大輔(社会学科専任講師)
企画担当	高倉 誠一 (社会福祉学科准教授)
会計担当	清水 浩一(社会福祉学科教授)
卒業生部会委員長	麓 良久(1971年卒業)
学生会委員長	清水 江理(社会学科3年)
事務局員	込宮美沙子

2018年度 学内学会活動予定

- 4月3日(火) 新入生ガイダンスで広報(白金校舎)
- 5月22日(火) 会報27号発行
- 5月29日(火) 第1回合同役員会議
- 6月16日(土) 第28回総会・特別講演会・懇親会
- 8月下旬 学生会夏合宿
- 10月上旬 社会学科ゼミサロン
- 11月中旬 社会福祉学科1年生コースガイダンス
- 11月中旬 社会福祉学科卒業生と在校生の交流会
- 11月中旬 社会学部研究発表会
- 2月中旬 第2回合同役員会議
- 3月上旬 卒業生部会主催「春の講演会」(予定)
- 3月中旬 Socially27号発行

お知らせ

社会福祉学科卒業生からの国家資格についての問合せは、学内学会事務局が、メールまたはファックスで受け付けます。後日、社会福祉学科に問合せ、わかる範囲で回答いたします。

編集後記

会報27号をお届けします。今年の会報は、今春に退任された河合克義先生による寄稿文と、昨年度総会後の、本学社会福祉学科卒業生である長崎広さんの特別講演会の報告文を掲載いたしました。会報発行にあたり、ご協力いただいた方々に、この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。

今年は社会学部が、社会科として誕生してから90年目の年となります。今年度も、学内学会は様々な活動を企画しており、より一層充実した活動を目指して参ります。皆様の温かいご支援とご協力のほどを、よろしく願いいたします。

(学生会編集担当 社会学科3年 渋谷晶)

連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37
明治学院大学社会学部附属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp
会費振込先：郵便振込 00170 - 5 - 96903
明治学院大学社会学・社会福祉学会

※住所変更の際はハガキ又はメールでご連絡下さい。

第28回総会・特別講演会のお知らせ

今回、総会後に開催される特別講演会の講師は、本学部卒業生である松田妙子さんです。松田さんが地域で活動する中で見えてきた、子育ての状況と予防型の支援について、地域の中で支え合いながらの子育て環境を作るために、我々ができることについて、お話をさせていただきます。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日時：2018年6月16日(土)
14時(受付開始13時30分)
会場：明治学院大学 白金校舎
3号館1階 3202教室

1. 総会 14時～14時45分
議題：(1)会長挨拶
(2)議長選出
(3)2018年度学会役員について
(4)2017年度活動報告および決算報告
(5)2018年度事業計画および予算
(6)その他
2. 特別講演会 15時～16時30分
講演者 松田妙子氏(本学部卒業生)
講演テーマ 支援の受け手が支え手にもなる地域社会 ～子育て支援の実践現場から～
3. 懇親会 17時～18時30分
(会場はパレットゾーン白金2階インナー広場「さん・サン」)